

語学留学報告

株式会社名村造船所

イギリス語学留学報告

山本 隆史*

Yamamoto Takashi



当社は、経済のグローバル化に伴う海外との取引増加に対応するため、職員の語学能力を開発するとともに、海外の経済・風土・文化・海運・造船事情等に精通することにより、企業の海外への対応力の向上を図ることを目的として、海外語学留学制度を設けています。筆者は本制度による語学留学の機会を得て、2019年9月～2020年3月の半年間、イギリスのイングランド北西部マンチェスターに滞在し、ホームステイをしながら現地の語学学校へ通う機会を得ました。期間中、言葉や文化、人種など様々な違いによって日本で暮らしていると直面することのないような問題に直面することもありましたが、それらも含めて毎日がとても新鮮でかつ刺激的な素晴らしい経験であり、間違いなく自分の会社人生の中で一番と言っても差し支えないくらい貴重なものになったと考えます。本稿では今回の語学留学経験とこの経験を通して得られたことについて報告します。

1. はじめに

筆者は学生時代には留学の経験はなく、社会人になってから英語でのコミュニケーションの機会もそれなりにあり、留学を経験しておけばよかったなと少しの心残りを持っており、2014年10月に佐世保重工業株式会社から当社へとやってきて現在に至りますが、転籍当時に当社に海外語学留学の制度があることを知り、そのようなチャンスがあるなら是非とも挑戦したいと感じるようになりました。心残りがあつたとともに、語学力の向上のみならず現地に住んで、現地のものを食べ、現地の文化に触れる経験はその後の人生に大きな影響をもたらす、自分自身を成長させてくれる魅力的なものに見えたからです。その後は社内英会話教室に通って、語学力向上に努めたりしましたが、幸いにして今回チャンスが巡ってきましたので、迷うことなく大きな希望を持って留学先へと足を運んだ次第です。

2. イギリスの風土や文化

2. 1 イギリスの地理、気候

イギリスはヨーロッパの北西部に位置する島国で、イン

グランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドで構成されています。緯度は高く、イギリスの中でも南に位置する首都ロンドンでも北海道を越えて、樺太中部あたりに相当します。そのため、私が滞在していた冬季の昼間の時間は短く、特に12月の冬至前後には夕方4時ごろに暗くなり、翌朝8時ごろに日の出を迎える、長い夜が続くという日々になります。また、太陽も常に低い位置にしかないので、昼間であっても常に夕方のような感覚になったものです。また、温帯で西岸海洋性気候に属して、北大西洋海流と呼ばれる暖流と偏西風の影響を受け緯度の割には温暖な気候です。イギリスの気候は「1日の中に四季がある」と言われるほど変わりやすい天気であり、大きな特徴として雨が多く、1日のうちに晴れたり雨が降ったりと、天気の変化も激しいです。ただ1日中雨が降り続けるようなことはあまりないためか、雨が降っても傘を使う人は少数派で、多くの人が濡れてもすぐに乾くような服装であることが多いと感じました。

2. 2 マンチェスター

私の留学先はマンチェスターという都市で、以前は産業革命の中心的役割を果たしたといわれるほどの工業都市でありましたが、今ではその面影も薄れ商業都市として発展を遂げております。また、マンチェスターユナイテッドとマンチェスターシティという世界的に有名な二大サッカークラブを擁し、オアシスやザ・スミスといった著名なロックバンドが結成されたようにサッカーや音楽文化が盛んなところでもあります。

マンチェスターと言えば真っ先に思い浮かぶのが、先に書いた通り、マンチェスターユナイテッド、もしくはマンチェスターシティという人も多いのではないのでしょうか。マンチェスターユナイテッドは以前、香川真司選手が所属していた、世界的にもとても有名なビッグクラブで、ここ数年はプレミアリーグでファンが期待するような優勝からは遠ざかっているものの、世界的にもファンを持ち、歴代で最も多い優勝回数を誇る名門クラブであります。マンチェスターシティは、これまでにバルセロナやバイエルンミュンヘンを率いてきたスペイン出身の名将ガエルディオラ監督が2016年から率いるチームで、2017-2018、2018-2019年の2シーズン連続のプレミアリーグ優勝をはじめとしてプレミアリーグ屈指の強豪チームとなっております。滞在中は両方のホームスタジアムに行く機会に恵まれましたが、現地での雰囲気として、マンチェスターユナイテッドは熱狂的ファンが多くとにかく人気のチーム、マンチェスターシティは地域密着型で実力も兼ねそろえておりファンの一体感があるチーム、とそれぞれ違った雰囲気を感じ取ることができました。写真1はマンチェスターシティのホーム「エティハドスタジアム」へ観戦に行った際に撮影した写真です。



写真1 エティハドスタジアム (2020年1月)

2. 3 イギリス英語や訛り

もともとリスニングは得意ではありませんでしたが、さらにはほとんど馴染みのなかったイギリス英語ということもあって、耳が慣れてきたと感じるまで2か月くらいかかってしまったような気がします。私たちが学校で習ってきたのは基本的にアメリカ英語ですが、ここでイギリス英語とアメリカ英語についての違いを紹介したいと思います。

第一に単語の違いが挙げられます。サッカーをイギリス英語では「football」、アメリカ英語では「soccer」、エレベーターをイギリス英語では「lift」、アメリカ英語では「elevator」と言うように、イギリス英語とアメリカ英語では全く違う単語を使うことがあります。

第二にスペルの違いが挙げられます。イギリス英語では「centre」や「theatre」とアメリカ英語では「center」や「theater」のように、スペルに違いがある単語も多くあります。

第三に発音の違いが挙げられます。詳しい説明は省略しますが、代表的なところとして R, A, O, T の音は違うと言われています。イギリス英語に慣れていないと聞き取りにくいと感じる理由は、この発音の違いが大きいと言われる。

イギリス人の中には、アメリカ英語は English ではないとあからさまに嫌う人もいて、違いを知っていないとどうしようもないので、正直な話とても厄介です。一方で発音の違いについては、日本人にとってはアメリカ英語よりは比較的発音しやすいと言われる点も特徴として挙げられます。

イギリスは北部にいくほど英語の訛りが強くなっていくと言われますが、マンチェスターの英語の訛りはかなり強めだったと感じました。学校で先生が使う英語は訛りの少ないニュートラルな英語ですが、街中に出ると通用せず何を言っているのかよくわからないことがよくありました。一方で何度か行ったロンドンでは全く違って英語の訛りは少なく分かりやすいと感じました。ロンドンはより多国籍な人が集まっている背景があるからだと感じるところです。

また、R と L の発音の違いについては、日本人の苦手とする音ということは有名な話です。実際のところ、私たちにとってはどちらも似た音に聞こえますし、渡英までは言い分けることが出来なくても、特に困らないのではないかと考えておりましたが、ネイティブにとっては全く別の音のようで、R の音を言えなくて伝わらない場面に何度か遭遇しました。例えばファーストフード店にて、おかわりを意味する「refill」について何度言ってもネイティブには伝わっていませんでした。渡英して間もない時期だったのでなぜわか

ってもらえないのかさえ当時はよくわかりませんでした。それでも会話の流れで理解してもらうようにしたり、別の言葉を使用して理解してもらおうとトライすればよかったのですが、そのような実力もなくもどかしい思いをしたものです。

3. 語学学校

マンチェスターはイギリスの中でも有数の規模を持った都市ではありますが、ロンドンとは違って日本人は比較的少ないため日本語に触れるような機会もほとんどなく、朝から晩まで英語漬けの日々を過ごしました。

私が通っていた語学学校(写真2)には、欧州、南米、中東、東アジアなど世界中から学生が集まってきており、私と同じように仕事で英語を必要とする社会人、イギリスの大学進学を目指す若い学生、国から派遣されている軍人、旅行ついでに興味感覚で学んでおられる年配の方など多種多様な目的を持った方々がおられました。留学期間も人それぞれで、2週間という人もいれば1年間という人もいました。ただ、2週間という人はヨーロッパ圏の比較的近場から来ていてすでに英語が自由に使える上級者、アジアや南米といった遠くの国から来ている人は、ほとんどが3か月以上は滞在していたようにも思います。

クラスは生徒のレベルによってA1、A2、B1、B2、C1、C2の6つに分けられ、それぞれのレベルの中でも2〜3つのクラスに分かれておりました。また、1つのクラス的人数は15名程度と比較的多く、常ににぎやかである一方、人の多さゆえに発言の機会はなかなか得られず出来る限り積極的な姿勢で受けないといけませんでした。授業はリスニングとスピーキング、ライティング、リーディングのバランスのとれた構成で、トータルスキルが向上するように考えられており、単に受けるだけの授業は少なくプレゼンやディスカッションの機会が多くありました。また、基本的に自分で選択する科目もあり、私は主にビジネス英語を学んでおりました。

どのクラスにいても境遇の全く違う方と話す機会はとても有意義なものであり、誰しもがきちんと自分の意見を持って積極的に発言する姿勢が印象的で刺激にもなりました。

また、ハロウィンやクリスマスなど行事のときには学校がデコレーションされ、その行事の雰囲気を学校でも味わうことができました(写真3)。クリスマスの際には、サンタの赤い帽子が生徒に配られ、皆で赤い帽子を被って授業を受けたのは良い思い出です。



写真2 半年間通った語学学校と筆者



写真3 学校の様子(左:ハロウィン,右:クリスマス)

4. イギリス生活の思い出

4. 1 ホームステイ含めた日常生活

留学期間中はホームステイ先(写真4、写真5)に滞在し、イギリスの文化、食事、考え方など英語以外にも多くのことを学ぶことができました。ホームステイ先は中心地(写真6)からバスで10分程度のとても便利な場所にありましたが、近くに大きな大学が2つあって学生が多いところであり、付近の治安は想像していたよりずっと良く、感覚的には日本と変わらないくらいかと思っておりました。もっとも慣れてきたころに油断して事件事故に巻き込まれるとはよく言われますので、危ないと言われるような地域には近づかない、夜間の外出は極力避けるなど、日本にいる時よりもはるかに気を使って過ごしていたことは確かです。

ホストファミリーは同じ家にはおらず、別の場所に住ん

でいるというちょっと珍しいところでした。そのホームステイ先には、頻繁に入れ替わりはあるものの同じ学校に通う生徒が常に6~8人程度おり、国籍も様々で常に笑いの絶えないようなとても賑やかな家で過ごしたことは生涯の思い出となりました。

学校まではバスで35分くらいかけて通学しておりました。バスに乗車する際には、手を横に出すことで運転手に対して乗る意思表示をしないと止まってくれませんので、バス停に立っているだけで基本的に止まってくれる日本のバスは素晴らしいと感じました。バスを降りる際には運転手に対して、「Thank you」やイギリス英語でカジュアルなありがとうという意味の「Cheers」と言ってから降りる人がほとんどで、イギリス人はとても礼儀正しい印象を受けたものです。



写真4 ホームステイ先の外観



写真5 ホームステイ先の内観（共有スペース）



写真6 マンチェスター中心地・ピカデリーガーデンの様子（クリスマスマーケット時）

4. 2 パブでの思い出

渡英当初の2019年9月から11月にかけてはちょうどラグビーワールドカップが日本で開催されていたことは記憶に新しいのですが、イギリスはラグビー発祥の地であり、イングランド、ウェールズ、スコットランドに加えて、北アイルランドはアイルランドチームとしてそれぞれの地域が出場していることもあって当然ながら大人気のスポーツであり、現地はとても盛り上がりおりました。特にイングランドは決勝まで残ったこともあって、南アフリカとの決勝戦はパブで観戦しましたが（写真7）、現地時間で朝9時のスタートながらもどこも超満員で人気の高さを実感しました。残念ながらイングランドは敗れてしまいましたが、試合後には皆で拍手して代表の健闘をたたえていたのが印象的でした。また、南アフリカにルーツを持つ人が多いためか、南アフリカファンも一定数おり、お互いのファンが仲良さそうに観戦していたことも合わせて印象的でした。また、決勝トーナメントの日本 vs 南アフリカ戦も観る機会がありましたが、現地の方で日本のユニフォームを着て応援されている方と話す機会がありました。予選での日本の戦いぶりに心を打たれすっかり虜になってしまったとのことで、試合には敗れてしまいましたがとても熱心に応援されておられた姿が印象的でした。イギリスの目の肥えた方をも虜にしてしまうほどの日本チームにちょっと誇らしい気分にもなったものです。



写真7 イングランド戦時のパブの様子
(2019年11月)

4. 3 週末の思い出

平日の放課後にはカフェに行ったり映画館に行ったりして過ごしておりましたが、授業のない週末にはイギリスの都市だけではなく、欧州各国へ羽を伸ばせたこともいい経験になりました。

マンチェスター空港はイギリスで3番目の旅客数を誇る規模の大きな空港で、欧州の主要都市へ就航しており、便利な空港でした。欧州ではローコストキャリア（LCC）が移動の足として定着しており、気軽にLCCを利用して欧州の都市を訪れ、歴史的な建造物を見学したり、各国の料理を味わったり、美しい自然に触れたりして楽しみました。その中でも特に印象に残った都市は、アイスランドの首都レイキャビク（写真8）、スイスの名峰マッターホルンの麓にあるツェルマットという町（写真9）、そしてスペインのカナリア諸島にあるテネリフェ島（写真10）というところです。いずれも欧州ではとても有名かつ人気のある観光地ではありますが、訪問した国と日本、そしてイギリスとの文化や国民性の違いを肌で感じ、変化を楽しむこともできました。



写真8 アイスランド・首都レイキャビクの街並み



写真9 スイス・アルプスの名峰マッターホルン
(写真奥)



写真10 スペイン・テネリフェ島の砂浜

5. おわりに

留学先にて、会社に所属しながら派遣されて英語学習に専念させてもらっている状況について話すと、誰しもから「何ていい会社だ」とうらやましがられ、非常に恵まれていると常感じておりました。これから行かれる方、これから希望される方もこのような貴重な機会を是非存分に活かしてほしいと思います。

あっという間の半年間でしたが、それだけ充実していたということだと思います。留学生活を通して、語学だけにとどまらず、文化や考え方の違い、日本の良いところ、悪いところなど、日本に住んでいると到底知ることのできないようなことを学ぶことができました。色々な人と出会い、様々な文化や考え方に触れた経験は、自分の中で財産となりました。私たちを取り巻くビジネス環境は大変厳しい国際競争の中にありますが、この競争を勝ち抜き今後さらに発展させていくためにも、引き続き語学力の向上に努めるとともに、時代の流れや変化に敏感となり、いかに対応していけるかを意識しながら今後の業務に取り組んでまいります。熾烈な国際競争の中にある業界の中で存在感を示せるよう、その一員となるために引き続き努力してまいりたいと思います。

最後は新型コロナウイルスの感染拡大のさなか、欧州方面からの帰国者から続々と感染者が出て問題となっていた3月に帰国し、皆さまには多大なご心配をおかけすることになりましたが、特に大きなトラブルにも巻き込まれることもなく帰ってくることができました。留学期間中に様々なサポートをいただきました関係各位、不在の穴を埋めていただいた技術開発センターの皆様、留学前や留学中にも気にかけていただき、激励のお言葉をいただきました方々へこの場をお借りしまして御礼申し上げます。